

『正義のアイデア』にみるセンの経済学： 帰納法と演繹法

平位 匡 池本 幸生

1. はじめに

アマルティア・センのケイパビリティ・アプローチは、概念上広く知られている。本アプローチは、人々が何をでき、どのような状態になれるのかを捉えるものであり、それによって我々には人に関わる様々な問題を分析することが可能になった。実際、センが提案しているのは、ケイパビリティを含むあらゆる情報空間を参照し、どのように社会を改善していくかということである。これは、主流派経済学が没頭する単なる経済成長の追求とは対照的である。しかし、本アプローチをどのように実践面で応用させるかについては多くの研究者にとって未だ不明確である。確かに、経済学的方法論を用い、人間は利己的で自らの効用を最大化するという想定のもと、操作することは可能かもしれない。しかし、この想定は非人道的であり明らかにセンが目指しているものではない。こうした彼の挑戦は、『正義のアイデア』の中で議論されている。

センは、正義の「理論」ではなく「アイデア」について議論する。伝統的かつ主流派の正義論は「正義とは何か？」という問いに答えようする傾向があるが、その完全な回答は人類史上未だ見つかっていない。より現実的で重要なのは、社会を改善していく過程で合意できる領域を見つけ出すことである。ここ

での主な課題は、実現可能な選択肢を比較し、その中から一番良いものを選び出すことである。そのために、我々の合意は現実には根差している必要があり、したがってモデル作りからではなく実在の問題から始める必要がある。センはこれを採用し、比較アプローチと呼ぶ。この方法は、実在のデータを用いて展開された「失われた女性」や飢饉に関する彼の議論に見られる。一方、主流派経済学とロールズの正義論は、人間の行動に関する仮定を立て、基本原則に基づくモデルを構築し、現実を脇に置き、そのモデルに焦点を合わせることで結論を導き出す点で、共に先験的である。この二分法（『正義のアイデア』で提案された「先験的制度尊重主義」対「比較アプローチ」）の論理的根拠は、諸議論を形式的な章（公式的な供述と専門的な導出に関心のある読者向けに書かれた章）と形式ばらない章（それらの結果の関連性に関心のある読者向けに書かれた章）に区分した彼の初期の研究（Sen 1970）に遡ることができる。さらに、この分類は二種類の推論の形—演繹法と帰納法—に対応しているように思われる。先験的制度尊重主義は、完全な正義を追求するために前もってある枠組み・モデルを演繹的に追求するのに対し、比較アプローチは、現実を比較するために事実と証拠に注意を払い明白な不正義を帰納的に割り出す。

本稿の目的は、センのアプローチが帰納法を採用するケンブリッジ学派とどのように関係しているかを考察することにある¹。そのために、まず『正義のアイデア』におけるセンのアプローチを要約し、イギリス・ケンブリッジに端を発する帰納法の概観、そしてそこで展開された古典派理論の再生を概説し、センのアイデアの形成を分析する。次に、センが提唱する描写の概念と役割を考察する。その際、描写は帰納的な推論に不可欠である点で、センのアプローチ

1 マーティンズ (Martins 2009) は、センのケイパビリティ・アプローチがポスト・ケインズ経済学と共にケンブリッジ学派の伝統に沿っていることを存在論の観点から論じた。本稿の焦点は、ケンブリッジで伝統的に採用されている帰納法の観点からセンの研究を考察することにある。

がケンブリッジ経済学者モーリス・ドップから直接的な影響を受けていることを明らかにする。最後に、センのアプローチのいくつかの拡張可能性をケンブリッジ学派との関連で議論する。

2. 『正義のアイデア』におけるセンのアプローチ

正義に対するセンのアプローチの根幹は、我々の推論における複数性の考察にある。一つの優勢な理論的根拠を基にした特定の原理原則からなる唯一の選択（つまり理論）を求める主流派の経済学や現代政治哲学とは対照的に、推論は多くの異なる形をとりつつも万人によって共有し得る余地が残されているとセンは主張する。実際、フルートと3人の子供の例を挙げ、社会正義のための競合する理論的根拠（平等主義、功利主義、自由主義）を示しつつも、部分的な合意に達する可能性を彼は提起する。要するに、「我々にとって価値があると考え理由のあるすべてのものを一つの同質的な量に還元することはできない」（Sen 2009: 239/池本 346）のである。つまり、彼がここで提案しているのは、「正義のアプローチは、正義の評価の構成要素として広範な複数性を取り込む余地を残している」（Sen 2009: 309/池本 441）ということである。

複数の推論と単数の推論の違いは、それぞれのアプローチに採用される情報に対応する。例えば、現代厚生経済学と政治哲学は、社会的配分のための有力な情報としてそれぞれ効用と（基本財を含む）資源に焦点を合わせ、その他の情報は排除されるかせいぜい軽視されるのに対し、センはそのような矮小な見方の代わりに我々の暮らしぶりや関心事の複数性を直接的に考察できるよう情報空間の拡張を提案する。その結果、その他の情報空間の重要性を割り引くことなく、ケイバビリティ、つまり「我々が価値を認める理由のあるものという観点から、互いに比較し判断することのできる諸機能の様々な組み合わせを達成する能力」（Sen 2009: 233/池本 338）に特に着目する。ケイバビリティを利

用するメリットは、我々の暮らしぶり、関心事や推論において還元できない多様性を表すことができる点であり、我々が部分的な合意に達することを可能にする。この観点からすると、事前に選択された情報空間を唯一普遍的に重要であると正当化することは、(ケイパビリティに変換する個人間の相違や責任に関する事項の欠如といった欠点は別にしても) 難しいことになる。

推論や情報空間の複数性を考えると、我々に必要なのは、公共的推論による批判的精査である。その際、(既得権益や偏見を排し) 他者への関心を含めるだけでなく、(地域社会における価値や憶測の精査不足に伴う偏狭主義を排し) 我々自身の考察を広げることが重要となる。この文脈で、センは「近くからだけでなく遠くからの視点」をもつことを可能にするアダム・スミスの方法論的手段である「公平な観察者」を参照する。そうすることにより、関連するより多くの情報が公開され、公共討論促進のために利用可能となる(そしてこれは、後に考察するように、センのアプローチにおける事実や証拠に基づく描写の重要性に通じる)。

正義に向けた公共討論の意義に対処するため、センは推論を構造上二つの種類—先験的・制度尊重主義(先験的アプローチ)と実現重視の比較(比較アプローチ)—に区分し、後者を支持する。先験的アプローチが完全な正義を特定し、それに従って制度を構築するのに専念するのに対し、比較アプローチは実在の社会的状況を比較することに従事し、実際の具現化に着目する。具現化における主な課題は、実現可能な選択肢を比較し、その中から一つを選び出すことである。我々の社会を改善するために、完全な答えを提示することは必要でもなければ役に立つわけでもない。この観点から、センは「ある二つの選択肢の間の比較を行なうために、その前に、最高の選択肢を特定しなければならないという信念には、何か非常に奇妙なものがある」(Sen 2009:102/池本 164)と考える。この点を説明するため、エベレストが世界一高い山であるという現実とは無関係に、キリマンジャロとマッキンレーが比較できることを例示す

る。したがって、より現実的で重要なのは、正義の前進の過程で合意できる部分を見つけ出すことである。

この見解は、存在しない完全な正義の模索より、むしろ明白な不正義の認識にセンが着目することに通じる。このことは、「我々を道理的に動かすものは、この世界が「完全に公正な世界」ではないという認識ではなく（そう期待する者はほとんどいない）、明らかに正すことのできる不正義が我々の周りにあり、それを取り除きたいという認識である」（Sen 2009: vii/池本 1）と、『正義のアイデア』の前書きの冒頭に明確に述べられている。こうした認識は可能であり、実際に価値評価の複数性と両立し得る。我々が最も価値を置く推論や情報空間が何であれ、少なくとも不正義の領域（例えば、極度の貧困や人種差別）において、部分的な合意に達することは可能なのである。

全体として、推論と情報空間の複数性に関するこれまでの議論に加え、センは『正義のアイデア』においてはじめて推論の構造について議論した。そこで先験的視点を比較的視点と区別し、後者を支持したのである²。

3. ケンブリッジ学派における帰納法

科学研究のための帰納法は、フランシス・ベーコンが経験主義の重要性を提案した 16 世紀に遡ることができる（Coates 1996）。それ以来、この論法がイ

2 推論の構造に関する明確な議論がなされる以前は、情報空間の相違に関する議論がセンの中では顕著であった。例えば、ヌスbaumは「センは単にロールズの総合的な理論から基本財のリストを取り出すに留まり、その他の構造について尋ねることはしない。つまり、単に基本財をケイパビリティに置き換えればすべてはうまくいくだろうことを彼は強く示唆しているのである」（Nussbaum 2003: 416）と指摘する。同様に、マーティンズは「センは基本財を情報空間として使うこと以外にロールズの正義論のいかなる特徴も批判せず、その代わりとなる情報空間以外のいかなる基準も提供していない」（Martins 2007a: 41）と述べている。

ギリス・ケンブリッジ経済学派によって追求され続けてきたことは、本学派が社会・倫理的関心事を伴う現実的諸問題を重点的に取り組むところから明らかである。とはいえ、このケンブリッジにおける帰納法を概説する前に、経済学方法論の歴史と哲学について手短かに概観しておきたい³。

経済学における帰納法と演繹法の歴史的発展の一例として、1880年代にカール・メンガーとグスタフ・フォン・シュモラーの間で起こった方法論論争(Methodenstreit)を挙げることができる。メキ(Mäki 1997)によると、これは社会科学史上最も有名な方法論論争であった。一方で、オーストリア限界効用学派メンガーは、理論に関与することの重要性を主張し、経済学における歴史主義的諸原理を批判した。他方で、ドイツ歴史主義者シュモラーは、社会の実際の動向に着目することの重要性を主張し、形而上学、抽象的思考、経済理論に由来する諸原理に反駁した(Frisby 1976, Mäki 1997, Maas 2010)。数年後、おそらくこの論争に対して、ジョン・メイナード・ケインズの父であるジョン・ネヴィル・ケインズは、次のようにより中立的な見解を提示した。

純粋な帰納が不適切ならば、純粋の演繹も等しく不適切である。あたかもこれらの方法の一方の使用は他方の使用を排除するかのように、これらの方法を相互に対立させる誤謬は、不幸にもごく普通のことである。実際のところ、経済科学の何らかの完全な発展が可能となるのは、2つの方法の偏見のない結合によってのみである。(Keynes, J. N. 1980 [1930]: 172/上宮 125)

実際に、帰納法と演繹法のダイナミックな相互作用は、経済学原理や経済学方法論の分野で発達してきた。例えば、ハウスマン(Hausman 1992a; 1992b)

3 この概観は、帰納法と演繹法は補完的であるという理解に基づく。本稿における分類は、したがって推論の形を2つに区分したセンの議論に倣うものであり、このような分類がEge et al. (2016)が議論するようにはっきりと明確化できないことは承知している。

は、合理的な経済理論を構築するため、おおよそ正しいといわれている仮定の意味合いを精査することで演繹法を正当化しつつも、経験や観察から学ぶことの重要性を強調した。同様に、カートライト (Cartwright 1999) は、帰納的議論は演繹的議論に再構成されるべきと主張しつつも、帰納法を用いることなく演繹的議論をすることはできないと論じた。さらに最近になると、ライス (Reiss 2012; 2014) は、演繹法を帰納法の特別なケースとみなし、問題はどの程度それぞれの論法が科学的推論に求められているかであると論じた。振り返ってみると、メンガーとシュモラーの間の方法論論争は、よりバランスのとれた見方で再解釈することができる。メンガーの見解は、伝統的な意味でいう先天説を避け、現実的かつ解釈的な意気込みを強調していたかもしれないし (Mäki 1990; 1997)、シュモラーの見解は、歴史と経済理論の分割を否定し歴史を理論の必要部分とみなす点で、科学的推論上、帰納法と演繹法は密接に繋がっていることを認識していたかもしれないのである (Frisby 1976, Reiss 2014)。より包括的に、ハンズ (Hands 2001) は、「この標準的な風刺は、どちらの側に対しても正当な扱いをしていない・・・両者の議論は、純粋な演繹法か純粋な帰納法かどちらかが経済学の適切な方法を構成するという単なる言い争いよりもずっと複雑である・・・」(Hands 2001: 40) と述べた。こうしたメンガーとシュモラーの再解釈は、先程引用し、ジョン・メイナード・ケインズは言うまでもなくケンブリッジ学派における経済学方法論についての考え方に影響を与えたジョン・ネヴィル・ケインズによる見解に一致している。

ケンブリッジ経済学派は、アルフレッド・マーシャルが経済学を「政治的・社会的および個人的な生活の経済的な側面および条件の研究を企てるものと解されているが、そのうちとりわけ重要なのは社会的生活に関するものである」(Marshall 1890 [1920]:42/馬場 52) と定義した当初から、社会的関心事に注目してきた。それは、精確な物理科学とは異なり、「人間性のたえず変動している微妙な力を取り扱っているものである」(Marshall 1890 [1920]: 14/馬場

19)。したがって、マーシャルは、経済法則や「ある条件のもとにおける人間行動にあらわれる傾向を命題としてとらえたもの」(Marshall 1890 [1920]: 38/馬場 47) を誘導(帰納)するため、手元にある観察可能な事実を集積・調整・分析し、そこから推論結果を導くことの重要性を一貫して強調した。この「マーシャル流」の見解は、のちにハーコートによって次のように解釈されている。

経済学者は、世界がどのように機能しているかを説明しなければならず、もしきちんと機能していないようであれば、それに対処しなければならない。・・・応用経済学への取り組みは、「ゲームのルール」の規定のもと収集された、歴史からの教訓・制度的状況・これまでの社会経済的状况に立脚し、経済学における適用可能性の重要性を強調する。(Harcourt 2003: 44)

社会的現実の重要性に対するこうした認識は、必然的にマーシャルやケインズ(以降、ケインズはジョン・メイナード・ケインズを指す)の著作にあった帰納的アプローチに繋がる(Carabelli 1988, Harcourt & Mongiovi 2001)。特に、ケインズは、概念を厳密かつ厳格にしすぎるあまり、歴史的事実の複雑性がばかりでなく実際に私たちが意図することの多くを無視してしまう問題点を指摘し(Coates 1996)、さらに演繹法に内在する先験性を次のように批判した。

また超越論的哲学が生まれた原因の一部は、確実な知識に到達しないこれらの問題に関しては真知は存在しないという信念と、形而上学的な問題に関するそのような確実な知識には通常の方法の力では及ばないという信念とがむずびつたことにある、と私には思われる。(Keynes 1921: 240/佐藤 277-278)

これは、先験性に反対するセンの議論(Sen 2009)にとってもよく類似している。この観点から、ケインズが一般化よりもむしろ個々の事象を優先することを力説していたとしても不思議ではない。ケインズ自身の言葉によると、

すべてを包摂するような一般化は実行不可能である。経済学における一般化とは、一般化によるのではなく、実例による考察である。機械的な、論理を利用することはできない。それは、一般的なケースのためではなく、実例のケースのためにあるに過ぎない。(Rymes 1989: 101/平井 114)

ここで大切なのは、問いかけられている質問を解く上で重要な現象を際立たせるような実例を選ぶことである (Coates 1996)。言い換えると、ケンブリッジ学派は、いかなる理論も「単に最後に実証的に分析されるのではなく、はじめから実証的な証拠に強く基づく」(Pasinetti 2005: 841) ことを求める。その結果、ケインズは、緩い概念を用いて文脈に応じた意味を推論することを認めたマーシャルを支持した (Coates 1996)。したがって、根本的な不確実性を伴う現実に目を向けた時、演繹法における一般的に厳格な規則性を要する閉ざされたシステムは、無効なものとなさされるのである (Lawson 2003)。

ケンブリッジ学派のもう一つの特徴は、我々の暮らしの中の倫理的側面に対する関心である。経済学の目的が現実を扱うことにある時、倫理的考慮はそれが人間性の一部である限りにおいて不可避である。実際に、マーシャルは倫理を経済学に不可欠なものとし、「倫理的な力は経済学者が考慮しなくてはならない要件の一つである」(Marshall 1890: vi/馬場 viii) と論じた。ここで興味深いのは、倫理的考慮が欠如した際に経済学が陥るであろう危険性について彼が警告し続けていたことである。

なるほど「経済人」の行動に関して抽象的な科学を構成しようとする企図もなされなかったわけではない。ここで「経済人」というのは、なんらの倫理的な影響も受けず、金銭上の利益を細心かつ精力的に、だが非情かつ利己的に追求しようとするものであるが、その行動を追求しようとした企図は成功もしなかったし、また徹底的に遂行されたことさえもなかった。

(Marshall 1890: vi/馬場 viii)

振り返ってみると、主流派経済学が倫理的問題に関心を払うことなく演繹的な

推論を採用した結果として直面する問題を、彼は予見していたように思われる。このような議論はケインズの著作にも見受けられる。実際、論理的な理論と日常的な推論の形態の間の体系的な相違を考察した結果、(倫理性に関連する)常識が帰納的实践には重要であることを、彼は認識していた (Carabelli 1988, Coates 1996)。

社会的・倫理的関心事に着目することは、科学研究のためのシステムが開かれたものでなければならぬことを必然的に要求する。このことは、全体が部分の総和以上であり得ることを想定しており (Harcourt 2003)、そのため社会過程の相互関連性を重要視する。当該の経済システムが複雑かつ進化し続けている限りにおいて、ケンブリッジ学派は、事実を重んじる経済理論だけではなく、経済的実態に慎重で目を行き届かせる経済理論に頼るのである (Pasinetti 2005)。これは、同時的一般均衡理論 (simultaneous general equilibrium models) よりも移動均衡理論 (shifting equilibrium model) に特有のものである (Harcourt & Mongiovi 2001, Harcourt 2012)。同様に、主流派経済学とは異なり、ケンブリッジ学派は複雑な過程において外部性 (特に位置的・相関的外部性) を重要なものとみなす点で、幸福に関する問題を分析する可能性が残されている (Bruni 2004)。

ケンブリッジ学派は、歴史的に社会的・倫理的側面を真摯に受け止めていること、そしてそのことは必然的にダイナミックで開かれたシステムを要求し帰納的分析を追求していることをここまで確認することができた。

4. センと古典理論

新古典派経済学とは対照的に⁴、古典派経済学は価値の役割を重要視する

4 ドップ (Dobb 1973) は、主流派と古典理論の不一致を表すため、「新古典派」の

(Dobb 1973)。ウォルシュ (Walsh 2000; 2003; 2008) によると、前世紀から始まった古典派経済学の復活は次の2段階に分けられる。まず古典派経済学の分析的枠組みの復活を試みたピエロ・スラッファによるもの、そして古典派経済学の倫理的側面の復活を試みたアマルティア・センによるものである。価値と切っても切れない関係にある社会的・倫理的関心事を考慮すると、この復活がケンブリッジで起こったのは何ら不思議なことではない。この観点から、マーティンズ (Martins 2009; 2011) は、古典派経済理論の回復はケンブリッジ学派における支配的な議題である、と述べている⁵。そこで、本章では、ウォルシュによりなされ、パットナムとマーティンズにより支持された分類を参照し、センのアイデアが作り上げられていく過程及びケンブリッジ学派におけるセンの立ち位置を考察することにする。

復活の第一段階は、1960年代にスラッファがリカードの原理に新たな光を投げかけたことにより起こった (Dobb 1973)。リカードによる手法が機械的なものと通常みなされること (Coates 1996) を考えると、この解釈は逆説的に聞こえるかもしれない。しかし、道徳哲学者として訓練されていないリカードは、スミスの著作を研究する際、彼の倫理的な含蓄を避け、自分との相違に注目したのである (Walsh 2000; 2003, Putnam 2002)。実際に、リカードによるスミスの限定的な解釈は、効用や主観的概念を嫌うスラッファ (Harcourt & Mongiovi (2001), Kurz & Salvadori (2005), Marion (2005)) にとって好都合であったように思われる。これは、第一段階において完全に物質的な意味で

代わりに「反古典派」を使うことを提案した。

5 ケンブリッジにおける古典理論の復活傾向をよそに、ハーコート＝モンジオヴィ (Harcourt & Mongiovi 2001) は、ケンブリッジ大学経済学部の現状を次のように嘆く。「大学教員のほぼすべての職はアメリカの大学院から採用されている。これは意図的な政策である。この目的は、彼らが優れているとみなすスタンフォード、ハーバード、MITといったアメリカの学校のクローンを仕立て上げることである。したがって、大切なケンブリッジの伝統は消えつつある。」

の日用品の生産と流通に特化したミニマリスト的見方（つまり価値を考慮しない形式的な分析）に繋がっていく（Walsh 2008）。こうした状況で、ポスト・ケインズ学派（例えば、スラッファ、ロビンソン）は、センが関心をもつ人間の選好や価値の衝突の意味合いに関することよりもむしろ、生産過程や価格の価値の意味合いに関する研究に従事したのである（Martins 2011）。一方、復活の第二段階は、第一段階による厳格な手法を放棄することなく倫理的問題に取り込むことになる（Walsh 2000; 2003, Putnam 2002）。特に、ウォルシュは、この段階におけるセンの貢献に特別な注意を払い、現代版古典理論の「エンリッチメント」と評価し、のちにパットナムも厚生経済学の観点から高く評価した。実際に、セン自身、倫理から遠ざかりつつある近代経済学の窮乏化を頻繁に牽制している。また、セン同様、パシネッティも第二段階の貢献者としてみなされる。彼は、倫理的概念を明確に組み込む構造的経済ダイナミクス（structural economic dynamics）という概念を用いて、現代版古典理論の生産サイドを補強した人物である（Walsh 2000; 2003）。

全体的に見て、ウォルシュの分析（復活における段階毎の違い）は、生産と効用/厚生との二項対立と共に考えるとより深い意味をもつように思われる。第一段階は生産サイドだけで生じたのに対し、第二段階は生産と効用/厚生との両サイドで生じた。そして、この違いは、近代経済学の祖であるスミスやリカードらにより考案された古典的な二項対立である交換価値（労働価値説）と使用価値（効用価値説）（Sen 2003）に対応しているのである。同様に重要なのは、この二項対立が、ケンブリッジにおける経済思想の二つの系譜、つまりケインズ学派と厚生学派に対応しているということである（Martins 2009; 2011, Harcourt 2012）。パシネッティは前者に、センは後者に属する。主流派経済学（新古典派生産関数及び新古典派効用関数）と競うべく多面的な構想を提供する点で、ケインズ学派と厚生学派は補完的關係にある（Martins 2011）。

とはいえ、センが学生だった頃、ケンブリッジではケインズ学派が支配的で

あった。実際、彼の博士論文の指導はジョーン・ロビンソンによるものであった。プレスマン＝サマーフィールド（Pressman & Summerfield 2000）によると、古典派復活のミニマリスト的見方の段階に従い、「倫理的戯言」から離れ、抽象理論に着目するよう指導された。センはその当時を振り返り、「ロビンソンは、実証主義的方法論を行使し、価値に関する発想の本来の妥当性、とりわけマルクス経済学を想起させるものを棄却していた」（Sen 2003: 1248）と評している。同時に、センは、スラッファからも指導を受けていた。スラッファは、研究生のメンターであり（Harcourt 2012）、古典理論復活の第一段階の先駆者でケインズ学派に従い生産サイドを重点的に取り組んでいた人物である。公平のために言うと、彼は古典理論復活においてミニマリズムの段階への貢献をしたが、哲学的思考が豊かであったことでも知られている（Coates 1996, Putnam 2002, Sen 2003, Walsh 2003, Pasinetti 2005）。例えば、ウォルシュ（Walsh 2003）は、モンジオヴィとの会談を引き合いに、古典理論の豊かな解釈に対する深い関心をどれだけスラッファの未刊の論文が示していたかを指摘し、そしてパシネッティ（Pasinetti 2005）は、リカードに関する出版物において、スラッファが数学的言語、公理的演繹、形式的証明を伴う形式的厳密性を意図的に避けていたことを説明している。同様に、しかしより明確に、セン（Sen 2003）は、スラッファの哲学への関与をヴィトゲンシュタインへ与えた影響から立証し⁶、次のように論じている。「ピエロ・スラッファが経済分析の

6 スラッファは、哲学上の問題における社会的慣習の重要性の観点からヴィトゲンシュタインに影響を与え、その結果「初期ヴィトゲンシュタイン」（『論理哲学論考』に見られる形式主義）から「後期ヴィトゲンシュタイン」（『哲学探究』に見られる自然言語）へ転身することになった。詳しくは、Sen（2003）を参照せよ。この転向とケインズの見解との関連については、Carabelli（1988）及びCoates（1996）を参照せよ。「出発点は常に大衆からの自然発生による哲学、つまり常識、でなければならない」（Gramsci 1971: 421）と（スラッファに影響を与えた）グラムシが議論したように、社会的慣習の意味合いは（形式主義とは対照的に）常識や

際に彼自身の哲学的立場によって影響を受けることなく、現代の主流派経済学を想起させる実証主義や具象的推論の限られた範囲に留まっていたとしたら、そのことはあまりにも驚くべきことである」(Sen 2003: 1253)。いずれにせよ、古典理論復活の第一段階で顕著であったケインズ学派とミニマリスト的見方に伴う生産サイドへの集中的関心に、センが不満をもっていたことは大いにあり得ることである。この点で、ハーコート (Harcourt 2012) は、センの厚生学派に対する選好を次のように回想している。「3巻から成るケインズの伝記を完成させたスキデルスキーをキングス・カレッジで祝う際、彼が幾分不機嫌になったことを私は覚えている。驚くなかれ、私たちがケインズについて話していたら、「それはそうと、ピグーのことを忘れないでくれ」とセンが言ったんだ」(Harcourt 2012: 22)。

この苛立ちからもわかるように、古典理論における価値の役割の重要性をセンは重々認識していた。そこに、もう一つの、そしておそらくより重要なセンへの影響が考えられる。それは、著名なマルクス経済学者で、センがメンバーであるトリニティ・カレッジのフェローであったモーリス・ドップによるものである。実際に、セン (Sen 2005) の議論を考慮すると、「センはスラッファの出版物から得られなかったことをドップから得たのである」(Walsh 2008: 227) というウォルシュの想定にセンは同意するであろう。ここで、もしセンがドップからそれほど影響を受けたとするならば、ドップは古典理論復活の第二段階に直接貢献したことになるのではないか。以下の分析からわかるよう

自然言語の概念に基づく。この転向に関連して、ヴィトゲンシュタインによる次の比較の概念に関する所見は、センと驚くほど一致している。「われわれの明瞭かつ単純な言語ゲームは、将来の言語規制を目指した予備研究ではなく、一いわば、摩擦や風圧を顧慮しない最初の近似である。むしろ、これらの言語ゲームは比較の対象として提示されているのであり、それらは、類似や相違を介して、われわれの言語の諸状態に光明を投げかけるべきものなのである」(Wittgenstein 1953 [1963]: 50e (section 130)/藤本 106, 傍点原著)。

に、ドップは、労働と効用の両価値説への関与だけでなく、理論化に先立つ描写への献身の観点から、第一段階と第二段階に亘り古典理論復活に重大な役割を果たしたのである。

5. センに影響を与えたモーリス・ドップ

センがスミスから影響を受けてきたことはよく知られており、そのことは公平な観察者という概念を用いて物事の見方を拡張させることの重要性を強調する点から顕著である。さらに、抽象的な推論や事前に決められた原則ではなく、具体的な状況や意味合いが不可欠であるという点でもセンはスミスを信奉している。現実社会のあらゆる状況を考えると、詳細な描写は価値評価の行使のために不可避となる。しかし、センが用いる描写の概念は、学生時代のメンターであったモーリス・ドップからより直接的に影響を受けているように思われる。実際に、センはドップの学術的貢献を高く評価している（例えば、Sen 1987; 2003）。そこでこれから、ドップの研究がセンにどのように影響して、具体的な事例、描写、価値評価の過程を注視するに至ったのかを考察することにした。

(1) 描写的豊かさと複数の価値

センの描写に関する解釈は、論文 *Description as Choice* (Sen 1980) の中で詳しく論じられている。その書き出しで、「描写は単に観察したり報告したりすることではない。それは選択の行使を伴うのである」(Sen 1980: 353) と述べている。描写が選択の行使である限りにおいて、良い描写はある主題となるべき物事との関連性を要求する。これは情報の欠如に繋がるが、同時に焦点を高める効果をもつ (Sen 1978)。この見解は、モデルを構築する際にドップが述べた次の注意書きと密接な関係があるように思われる。

モデル作成者は、ある構造よりも別の構造の方を選択するばあい、人間の思考がその内部で働くことのできる足場ないしフレームワークを提供しているだけではない。一定の要因や関係を強調し、他のものは排除するか影の方に追いやっているのでもある。そしてモデル作成者はそうすることで、現実を歪めているのか明らみに出しているのか・・・と判断することができる。おそらく彼は、現実のいくつかの隅や側面、あるいは反覆される一定の状況を明らみに出すと同時に、他のそれらをあいまいにするか、全面的に隠してしまうかしているのである。(Dobb 1973: 7/岸本 18)

このドップによる見解は、描写は選択であり、現実を強調・説明すると共に排除・歪曲し得るとみなすセンの解釈と一致している。

描写が選択のバイアスにさらされている程度において、いかなる描写もある種の価値観を伴う⁷。そして、描写と価値の不可避な関係は、ドップの著作に多く見られる。特に、価値に関する理論を構成する際、前もって原則を組み立てるのではなく、十二分な事実の記述を提供し具体的な状況を描くことを提案した、次の文面に表現されている⁸。

また形式的適合性に関するアプリアリな考慮にたいして少しも配慮しなくても、・・・多くの叙述を行うことができるように思われる。こういう叙述が全体として、もし首尾一貫した真実なものであるならば、それ自体が我々の価値論になるのではないだろうか?・・・何故形式的適合性について論ずるかわりに、単純に、どのような種類の経験的叙述が事実忠実に

7 価値は規定 (prescription) 以外の多くの形態をもつ。これについて、センは次のように述べている。「価値判断は、描写に関わるであろう特徴の中でももちろん人間の想像や取り組みに関わるものであるが、その領域を主に倫理的・規範的関心に還元することは間違っているだろう。」(Sen 2005: 109)

8 ドップの理論は、主流派経済学特有の前もって定められた原則に基づく理論ではなく、描写や叙述の蓄積によって構成されたものである点で帰納的であることに留意されたい。

あるかということ、ろんじないのだろうか？(Dobb 1937: 3-4/岡 3-4)
ドップにとって、価値は十分な描写や叙述なしに簡単に損なわれ得るものであり、その結果、経済学は単に前もって定められた原則に基づく形式的な理論の構築に行き着き得るのである。実際に、この見解はセンに受け継がれ、「豊かな描写」は、現代経済学にとって重要だが過度になおざりにされているため、今後全体的に優先して進むべき方向性であると私は主張しておきたい」(Sen 2005: 108)と述べている。

それに応じて、ドップは生産と厚生 の両領域で価値に関する理論を提案し(Dobb 1973)、これらはセンにも評価されている(Sen 1987)⁹。まず、ドップは価値に関する労働理論において、「そのようなものとして、「搾取」は、・・・ けっして何か「形而上学的な」ものでもなければ、たんに倫理的判断に過ぎないものでもない。それは、ひとつの社会・経済的関係性を事実 に即して述べたものである」(Dobb 1973: 145/岸本 174)と論じた。これに対し、センは「ドップは、価値に関する労働理論を「生産それ自体の過程への参加」に 関与する人々の役割を強調するものとみなした」(Sen 1987: 911)と分析している。さらに、ドップは価値に関する効用理論において、「単に人々が選択するという ことだけしか設定されず、いかに選択するかとかその選択を左右するものは何 かということについてさえ、何事も述べられないとすれば、経済学は人間の選 択に関する一種の代数学しか与えることができないように思われる」(Dobb 1937: 171/岡 164)とも論じた。これに対し、センは「主観的効用理論を「顕 示選好」アプローチに置き換えることにより生じた描写の窮乏化を彼は嘆いた」(Sen 1987: 911)と分析している。全体として、センはドップの価値に関

9 セン(Sen 2003)によると、生産サイドにおける描写の重要性は、スラッファ(Sraffa 1960)によって既に提示されていた。このことは、ミニマリズムで価値の重要性を考慮しない形式的分析に注視したとするスラッファに対する共通の理解とは逆説的である。

する理論を「人間が関与する諸要素に焦点を合わせることにより様々な特徴を区別する方法」(Sen 1987: 361)として高く評価し、これはセン自身が触れているように「物的外被のもとに隠された関係(として表現される)二人の人物の間の一関係」(Marx 1887: 45/長谷部 68, 括弧筆者)というマルクスの価値の概念に基づく。つまり、描写は事実に関するだけでなく関連性という視点からバイアスがかかる。そして、これは「いかなる描写も区別と選択を伴っていることから、問題の本質は選択の過程と描写の目的との関連性にある」(Sen 1980: 361)という基準に依拠している¹⁰。したがって、我々の目的に基づく選択というバイアスにさらされている程度において、描写はある種の価値観を伴っているのである。

価値評価に関して、センは一貫してその複数性の重要性について議論している。我々の価値評価を偏向することなくより公正にすることを可能にするため、彼は豊かな描写を強く主張する。これに関連し、センは描写を規定 (prescription) や予測と対比するものとみなす一般的な見方ではなく、それを人間性の一部分である好奇心に基づくもので、そこには規定や予測も含まれると認識し、次のように述べている。「描写の選択基準は、探求を引き起こす好奇心に関係しており、この好奇心に予測的・規定的関心が反映される必要はない。……人間が予測的・規定的事項以外の何にも関心をもたないという見解は、人類を不当に扱うことに等しい」(Sen 1980: 360)。この議論は、再度ドッ

10 これに類似する解釈はヴィトゲンシュタインの著書の中にも見受けられる。「われわれが「記述」と呼んでいるものは、特殊な適用のための道具である」(Wittgenstein 1953 [1963]: 99e (section 291)/藤本 198, 傍点原著)。この点から、コーツはヴィトゲンシュタインとセンの類似性を次のように分析している。「言葉、より厳密には描写、は事実の絵画的表象ではなく目的に応じて異なる特徴をもつと考える点で、センはヴィトゲンシュタインと同意見である。両者にとって、描写は活動であり、事実の絵画的投影は目的に応じて実行に移される必要がある」(Coates 1996: 162-3)。

ブによる次の見解の延長とみなすことができる。「理論の展開の現実の姿を見ると、「実証的」要素と「規範的」要素とは分離しにくいことがはっきりしてきたし、ますます融合する傾向をしめすようになってきた」(Dobb 1973: 15/岸本 26)。結局のところ、規範的主張（例えば、規定、予測）は、描写を選択する際の目的の部分的なものでしかない。この点は、倫理/道徳・認識・美など価値判断のさまざまな形態を承認するパットナムによっても支持されている(Putnam 2002)。

したがって、描写とは包括的な意味で我々に内在する探求を表している。この点で、社会科学者らは彼ら自身の道徳の見解を表明するよりも、公平な価値評価が促されるよう描写的主張の提供に関与すべきであると、センは啓蒙的に論じている。

貧困を研究する社会科学者にとって、課題は自らの道徳を解き放つことにあるのではない。むしろ、貧困とみなすものに関して社会的に抱かれた見方に沿い、それに関連する統計データを評価することにある。こうした見解自体は、道徳的であるかもしれないしそうでないかもしれないが、道徳的な場合であったとしてもこうした見解を研究している人にとって、それらは事実即した事柄、つまりそのように抱かれた見方である。規定が作られることを描くことは、描写であり規定ではない。(Sen 1980: 367, 傍点原著)

センにとって、規定的・予測的主張は共に、それ以外の目的を排除しているため、描写上窮乏化したものである。この観点から、彼は、予測的・規定的経済学を予測的・規定的関心を含む複数の目的を収容可能な「描写的経済学」と区別する(Sen 1980)。実際に、健全な公共討論は豊かな描写なくして成し得ず、この点を論じたドップをセンは次のように賞賛している。「公共討論・論議における経済学の役割に対する彼の見解に注目することなしに、モーリス・ドップの経済学への功績を十分に理解することはできない」(Sen 1987: 910)。

我々の価値判断が位置的客観性に依存する (Sen 1993b; 2009) 限りにおいて、描写的経済学で利用可能な豊かな描写は、公共討論を公平に機能させるために極めて重要である。

豊かな描写は倫理的関心事を明確かつ鮮明にするため、スミスの公平な観察者の概念と関わってくる (Walsh 2000)。なぜなら、道徳上の義務感に関する我々の認識は、他者の窮状や苦痛に想像上入り込む能力に依存することを前提にしているからである。規範的要素を伴う「理想の観察者」の概念は、ロールズからも明らかなように公平性を分析的な道徳的判断とみなすのに対し、「公平な観察者」の概念は、公平性を実験的な道徳的判断とみなすため描写的要素と相性が良い (Comim 2002)。公平性に対するこの描写的解釈は、存在論的ではなく認識論的な推論に基づく倫理的客観性の概念に通じる (Sen 2009)¹¹。

この観点から、セン (Sen 1980; 2009) は、倫理的問題を操作可能にすることに嫌悪感を示す (例えば、不平等の倫理的指数)。彼は自らのアプローチであるケイパビリティ・アプローチを価値評価システムに限定し、意思決定の過程を開かれた状態で熟慮・確認できるように努める (Gasper 2008)。このことは、我々が行う価値評価の多様性を考慮すると不可避である。センが一貫して主張するように (その最も啓蒙的なのは Sen 2009)、実際には情報が十分に与えられていたとしても、すべての点において同意することは我々にはできないであろうし、その必要もない。この点をパットナムは次のように再解釈・補強している。「諸機能に対する「価値」や「それらに価値を与える理由」に関して相違の余地は残されているが、この相違の余地こそが、不都合なものとしてではなくむしろ価値のあるものとしてセンがみなすものである」(Putnam 2003: 401)。

11 より正確には、センが批判するのはプラトンの存在論であって、必ずしもアリストテレス的存在論ではない。この点で、センのアプローチを存在論的とするマーティンズの見解 (Martins 2006; 2007a; 2007b; 2011) は、後者の意味で可能であろう。

このことは、開かれたシステムの正当化と関連してくる。開かれたシステムとセンのケイパビリティ・アプローチの適合性はマーティンズによって次のように論証されている。

センが強調するケイパビリティや機能は、開かれたシステムにおいてのみ意味をなす・・・なぜなら、もしケイパビリティ、潜在性、才能や能力が常に閉ざされたシステムで実現されるか否かを問題とするならば、それらはいかなる分析にも意味をもたないからである (Martins 2006: 678)

(主流派経済学で採用されている) 閉ざされたシステムが、常に完璧な答えを提供し価値の衝突を排除する一方、センのアプローチは、部分的順序という実践的手段を提示し様々な価値を認める。このヴィジョンは、抽象的な推論や理論に付随する、前もって定められた原則とは対照的に、価値評価の行使において描写的豊かさの必要不可欠性を表したドップの主張と一致している。

(2) 描写と帰納法

我々の目的や価値評価の多様性は必然的に豊かな描写を必要とし、そのためセンが開かれたシステムにおいてケイパビリティ・アプローチを提案するに至ったことを確認した。さてここで、描写と帰納を区別することが重要であり、そのことはケインズにより統計の分野で明確に議論されている。

統計学の理論は、二つの部分に分けることができる。多くの目的にこのような区別は役に立つ。統計学の理論の第1の機能は、純粹に記述的である。・・・この理論の第2の機能は、帰納的である。それは、すでに観測された事象にみられるいくつかの特性についてその理論が提供する記述を、まだ観測されていない他の事象のそれに対応する特性へ拡張しようとすることである。(Keynes 1921: 327/佐藤 377, 傍点原著)

ケインズはこの違いを認め、描写と帰納に従事する者をそれぞれ「描写的統計学者」「帰納的科学家」と呼び、前者を後者の奉仕者とみなした (Carabelli

1988)。ここで興味深いことは、この点におけるセンとドップの相違である。センは、倫理的問題を操作可能にすることに対する嫌悪感からも明らかなように、帰納よりも描写の段階を優先するようと思われる。それに対してドップは、一般化の可能性ばかりでなくその重要性を次のように明確に述べている。「この分類を基礎にして分析を進めることによって、後には若干の限られた一般的命題を組立てることができる」(Dobb 1937: 4/岡 4)。

これにより、ドップの(価値に関する理論を含む)経済理論の構築が、「経済社会の構造と基盤とを記述するしかたに従って、そしてそれをそのように記述することが歴史的判断と同時代の社会的実践とにとってもつ意義に従って」(Dobb 1973: 36/岸本 49)可能となった。さらに重要なのは、ドップが一般化のない描写を限定的で古典政治経済学の誕生以前に共通していたと考えていたことであり、それは次の議論から明らかである。

政治経済学の場合、『国富論』の刊行以前には、経済問題の研究は記述的・分類的な段階、つまり初歩的な一般化と特殊研究の段階、をこえていなかったということはおそらく真実であろう。アダム・スミスの労作とリカードオ(リカード)によるその一層厳格な体系化によってはじめて政治経済学は統一的な量的原理を創りだした。そしてこの原理によって経済体制の一般的均衡という言葉を使って公準を設定すること—体制の中の主要要素相互の間に行われる一般的関係を決定論的に叙述すること—ができるようになったのである。政治経済学においてはこの統一原理、もしくは一般的叙述の体系、は量的形態をとり、価値論によって構成された。(Dobb 1937: 5/岡 4-5, 括弧筆者)

ここから、センのアプローチは、ドップの一般化された帰納的部分ではなく描写的部分に影響されているように思われる。実際に、セン自身、ドップとの違いを次のようにほのめかしている。「真に「インテリ向きの」理論と一般向けの文体のたぐいまれな組み合わせにおいてドップに匹敵する経済学者を見つけ

ることは難しいだろう」(Sen 1987: 910)。センは後者、つまり一般化を要する理論よりも公共討論を促進する描写を強調する。この観点からすると、彼が長年にわたり関与してきた社会選択理論は（先験的ではなく比較的と分類しているものの）一般化されすぎたもので、これこそがより描写的関連性を認めるケイパビリティ・アプローチを展開させていく理由となったのであろう。振り返ってみると、センが一般化よりも描写を優先する動きは早くも1970年の著書に見受けられる。そこでは、彼が抱えていた「不治の統合失調症」(Sen 1970: vii)を反映すると共に、理論化に際して描写の重要性を強調するため、形式ばらない（事実/証拠に基づく）章から始め、形式的な（数学・演繹的な）章を続けている。

さて、ここでウォルシュによる古典理論復活の分類に立ち返ってみると、もう一つの解釈が可能である。ドップは具体的な事例を描くだけでなく、それらを帰納的に理論化することで（価値の一部として）倫理的関心と呼び覚ました限りにおいて、復活の第二段階が彼に端を発すると認識することは適正であろう。このことは、ドップがセンとは異なり「第一段階で与えられた厳格な手法を犠牲にすることなく」(Putnam 2002, Walsh 2003) それを行ったことから、より一層道理にかなっている。この点をセンは暗示的に次のように認めているように思われる。「Piero Sraffa (1960) による有力な『経済理論批判序説』と共に、『価値と分配の理論』(1973)において、彼はとりわけケンブリッジ政治経済学の新たな進展に応じた」(Sen 1987: 910)。つまり、センはドップの研究を、スラッファによって始まった復活の第一段階の拡張とみなしているのである。あるいは、センが、一般化がまだなされていなかった『国富論』出版以前の古典理論の冒頭、より正確には古典思想、に戻ったと理解するのがより正確かもしれない。実際に、センがスミスの議論を参照する際、（公平な観察者の概念を含む）そのほとんどは『国富論』以前に出版された『道徳感情論』に由来している。この理解からすると、センによる貢献は、古典理論復活の第一段

階でも第二段階でもなく、古典理論の出発点に戻ったとみなせるであろう。さらに、『正義のアイデア』において、スミスの公平な観察者の有効性を再主張し、公共討論の過程が既定のモデルによって邪魔されることなく、事実と証拠からなる描写の一般化可能性を模索しているのである。

6. ケンブリッジ学派にみるセンのアプローチの拡張可能性

ケイパビリティ・アプローチを用いて暮らしぶりや正義を評価する際、センは（他の情報を排除することなく）ケイパビリティと機能を最も重要なものとみなしている。ケイパビリティと機能は、具体的な事例が描かれる情報空間である。これらの情報の重要性を主張する一方、一見するとセンは自身のアプローチのためのいかなる方法論も提示していないように思われる。実際、この点について彼は「ケイパビリティ・アプローチは、・・・それ自身では、その情報をどのように使うのかということについて特定の方法を提案しているわけではないということである」（Sen 2009: 232/池本 336）と明言している。ここでケインズによる区別に話を戻すと、ケンブリッジ学派のケインズ、スラッファ、ドップによるアプローチがより帰納的であるのに対し、センのアプローチはより描写的であるということになる。

とはいえ、センのアプローチを純粋に描写的とみなすのは決して適切ではない。実際のところ、一般化の可能性を彼は除外していないのである。先験的方法で正義の理論を構築することは現実的でも必要でもないことを強調する一方で、万人が認め得る否定しようのない不正義の存在（例えば、深刻なケイパビリティの欠乏）を認識し、「正義が追求されゆく感覚に関する共通の理解やこの感覚が全く信じ難いというわけではないという理解が備わっているに違いない」（Sen 2005: 111）ことを主張する。例えば、人権の事例を取り上げ、偏狭的ではなく国境を越え得る推論の可能性を議論している（Sen 2004）。さらに

初期の研究において、彼はケイバビリティとアリストテレス的見方の密接な関係を明確に認めている (Sen 1993a)。この観点から、彼が言うところのケイバビリティは人間のニーズと密接に繋がっていて (Crocker 1992)、その限りにおいて、このアプローチが多様性の本質的な特徴を保持しつつ一般化することが (とりわけ不正義の領域において) 可能となる。

このように考えると、センのアプローチは純粹に描写的なものではなくむしろ帰納的なものとみなすほうが正確である。このアプローチが描写的に見えるのは、帰納的方法で理論を構築する場合と比較した時に限られる。ここで、ケンブリッジ学派に従ってより構造化・一般化された形式で、センのアプローチが拡張される可能性を紹介しておきたい。

まず一つ目の可能性は、パシネッティによって提案され、ウォルシュ、パットナム、マーティンズ (Walsh 2000, Putnam & Walsh 2007, Martins 2011) によって支持されたケインズ・スラッファ理論の枠組みから派生するものであり、これは二段階のアプローチから成り立つ。一段階目は、時を超えて高い一貫性をもつ現実の客観的要素に着目する「純粹な理論」で、二段階目は、個人や社会的行動に着目する「制度的分析」である (Pasinetti 2005)。つまり、一段階目の純粹な理論は開かれた理論ということになる。なぜなら、予め基本的かつ客観的な関係 (例えば、人間のニーズ) を特定するものの、二段階目の制度的分析のために多くの余地を残しているからである。その論拠は、新古典派的枠組みを批判的に捉えるあまり、「その明白な形式的堅実性・一貫性を認識できなくなるほど盲目になるべきではない」 (Pasinetti 2005: 840) ということにある。しかし同時に、他の社会科学からのアイデアに開かれているばかりでなく、歴史的発展の影響を受け続ける点で動的である限りにおいて、この純粹な理論は固定化されていない点を心に留めておくことも重要である。このことは、帰納が (論証的理由に基づく) 演繹的でも (経験に基づく) 実証的でもなく、その両者の中間辺りにあるとするケインズによる見解と一致する (Cara-

belli 1988)。この点で、パシネッティによるケインズ・スラッファ的枠組みは、ケンブリッジ学派に従っている。

二つ目の可能性は、ヌスバウムによる一連の著作に提示されている立憲 (constitutional) アプローチである。彼女が唱えるケイパビリティ・アプローチは、既に定着し広く知られているものの、上述のケンブリッジ学派に内在する一つ目の可能性との類似性という観点からここで考察してみることにする。まず初めに、ヌスバウム (Nussbaum 2003) は、構造の欠如を理由にセンのアプローチを批判する。アリストテレスが定義する人間性に従って特定の基本財の重要性を強調していたセンの過去を認識しつつ、今日では自由を万能なものとしそれ以外の構造について問わない傾向にあり、結果としてセンを「新自由主義的」方向へ進ませている点を指摘している。これに代わり、ヌスバウムは立憲的理念の一部として国家が履行し得るケイパビリティのリストを提示する。ここで重要なのは、このリストが固定されているものではなく (そのため存在論的なものではなく)、現行の見方が誤っている可能性を考慮し、将来にわたり改正の余地を認めていることである。同時に、このリストを最小閾値とみなし、これに達しない限り正義が遂行されることはないとする一方、このレベル以上であれば社会文化的相違をはじめとする様々な状況に応じて「多様な実現可能性」の余地が残されている (Nussbaum 2000; 2006)。こうした彼女の見解、つまりこのリストは不屈で交渉の余地のない要求なのではなく世界が進むであろう一連の方向性を示している点を、パットナム (Putnam 2003) は次のように支持している。

ヌスバウムのリストにあるケイパビリティ (及びそれに付随する機能) が人間繁栄の一部と言うことは、あらゆる人がそれらすべてを有しなければならないということではない。それらはきわめて多くの人の暮らしの繁栄にとって重要で価値があり、ある集団がこうしたケイパビリティを欠いたり許容最低レベル以下で有しているような社会では人の暮らしは妨げ

られていると言うことである。(Putnam 2003: 408, 傍点原著)

つまり、それぞれのケイパビリティ自体を強制的に行使しなければならないわけではなく、あらゆる人がそれらを行使する自由を享受する状況をもたらすためにできることを少なくとも妥当な最低水準まで果たさなければならないということである。この点において、ヌスバウムの見解は倫理的に客観的であるものの普遍的である必要はなく、したがって人間の繁栄に要する基本的権原が提示されることによって開かれたシステムが侵害されることはない。この限りにおいて、彼女のアプローチは演繹法とは異なり、ケンブリッジ学派に内在する帰納法に準じている。

7. 終わりに

実際のところ、我々は必ずしも主流派経済学による提案に従っているわけではなく、むしろ数々の反論を提示している。例えば、自由貿易協定 (FTA) を取り決める際、主流派経済学者はある種の経済モデルをベースに議論を展開する。しかし、それはどれだけ強力なものであったとしても、多くの議論のごく一部に過ぎない。実際に、それに反対する者は、そのような経済学的方法論を超えた見解の正当性を訴える。ここに (センの議論の前提となる) 我々の価値評価における多様性の重要性がある。ここで重要なのは、政治的諸問題が推論によって対処されることがめったになく、そのためあらゆる人が認め得る合意が得られていないということである。この程度において、センのアイデアを取り込む余地は残されているように思われる。

センが提唱しているのは理論ではなくアプローチである。アプローチを「操作可能」にしようとしているのではなく、民主主義を通じてまともな社会の実現に必要なプロセスを提供しようとしているのである。曖昧に聞こえるかもしれないが、これこそが実際に我々が現実社会で通常行っていることなのであ

る。社会正義のための多様かつ競合する理由の存在を認めつつ、部分的合意に達する可能性について彼は提起している。もしこのような多様性が認められるとするならば、演繹的モデルも理論も構築することはできないであろう。それでもなお、社会改善に関してある程度まで合意をすることは可能である。特に、あらゆる人にとって明白な不正義において意見の一致を得ることは大いにあり得る。客観性と公平性を組み込む民主的プロセスを通じてのみ、我々はよりよい社会に向けた合意に達することができる。つまり、豊かな描写を通じた帰納的方法によってのみ、複数の価値は反映され得るのである。

『正義のアイデア』において、センは、長い間続けてきた情報空間に関する議論（効用、資源、基本財に対するケイパビリティと機能）に加え、構造の観点から自身のアプローチをその他のものと明確に区別した。本稿で明らかになったように、現代の主流派経済学によって採用されている先験的アプローチが演繹法に基づくのに対し、彼の比較アプローチは帰納法に基づく。演繹的分析が支配的地位を享受しているのは、経済学の学説史上決して長いわけではない。実際には、演繹的分析は限界革命が起こった19世紀末になってようやく勢力を拡大したのである。それ以前は、経済学者は実在の問題に基づく帰納的分析を主に利用していた。この傾向は、とりわけケンブリッジ経済学派に当てはまる。この意味で、センは、主流派経済学に背くこのケンブリッジの伝統に従っているばかりでなくこれを復活させていると結論付けることができる¹²。

謝辞

本稿は2016年1月19日に *Review of Political Economy* (Taylor & Francis)

12 ケンブリッジ経済学派の主要なジャーナルである *Cambridge Journal of Economics* が、バシネットティと共にセンをその後援者に迎え入れているのは決して偶然ではない。

に掲載された論文 (<http://dx.doi.org/10.1080/09538259.2016.1259873>) の Accepted Manuscript の翻訳である。 *Review of Political Economy* 匿名査読者及び HDCA 2015 年学会参加者からの貴重なコメント、そして公益財団法人電気通信普及財団及び HDCA による学会参加のための財政的支援に感謝の意を表す。

参考文献

- Bruni, L. 2004. 'The "happiness transformation problem" in the Cambridge tradition.' *European Journal of the History of Economic Thought* 11, no. 3: 433-451.
- Carabelli, A. M. 1988. *On Keynes's Method*. Basingstoke: Macmillan.
- Cartwright, N. 1999. *The Dappled World: a study of the boundaries of science*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coates, J. 1996. *The Claims of Common Sense: Moore, Wittgenstein, Keynes and the social sciences*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comim, F. 2002. 'The Scottish tradition in economics and the role of common sense in Adam Smith's thought.' *Review of Political Economy* 14, no. 1: 91-114.
- Crocker, D. A. 1992. 'Functioning and capability: the foundations of Sen's and Nussbaum's development ethic.' *Political Theory* 20, no. 4: 584-612.
- Dobb, M. 1937. *Political Economy and Capitalism*. London: G. Routledge & Sons. (岡 稔 訳 [1952] 『政治経済学と資本主義』 岩波書店。)
- Dobb, M. 1973. *Theories of Value and Distribution since Adam Smith*. Cambridge: Cambridge University Press. (岸本重陳訳 [1976] 『価値と分配の理論』 新評論。)
- Ege, R., Igersheim, H. and Le Chapelain, C. 2016. 'Transcendental vs. comparative approaches to justice: a reappraisal to Sen's dichotomy.' *European Journal of the History of Economic Thought* 23, no. 4: 521-543.
- Frisby D. 1976. 'Introduction to the English translation.' In *The Positivist Dispute in German Sociology*, edited by T. W. Adorno, H. Albert, R. Dahrendorf, J. Habermas, H. Pilot and K. R. Popper and translated by G. Adey and D. Frisby. London: Heinemann.
- Gasper, D. 2008. 'From "Hume's Law" to problem- and policy-analysis for human devel-

- opment. Sen after Dewey, Myrdal, Streeten, Stretten and Haq.' *Review of Political Economy* 20, no. 2: 233-256.
- Hands, D. W. 2001. *Reflection without Rules: economic methodology and contemporary science theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Harcourt, G. C. 2003. 'Cambridge economic tradition.' In *The Elgar Companion to Post Keynesian Economics*, edited by J. E. King. Cheltenham: Edward Elgar.
- Harcourt, G. C. 2012. 'Keynes and his Cambridge pupils and colleagues.' *Meiji Journal of Political Science and Economics* 1: 12-25.
- Harcourt, G. C. and G. Mongiovi. 2001. 'The Cambridge tradition in economics: an interview with G. C. Harcourt.' *Review of Political Economy* 13, no. 4: 503-521.
- Hausman, D. M. 1992a. *Essays on Philosophy and Economic Methodology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hausman, D. M. 1992b. *The Inexact and Separate Science of Economics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gramsci, A. 1971. *Selections from the Prison Notebooks of Antonio Gramsci*, edited and translated by Q. Hoare and G. N. Smith. London: Laurence and Wishart.
- Keynes, J. N. 1890 [1930]. *The Scope and Method of Political Economy*. London: Macmillan. (上宮正一郎訳 [2000] 『経済学の領域と方法』日本経済評論社。)
- Keynes, J. M. 1921. *A Treatise on Probability*. London: Macmillan. (佐藤隆三訳 [2010] 『確率論』東洋経済新報社。)
- Kurz, H. and N. Salvadori. 2005. 'Representing the production and circulation of commodities in material terms: on Sraffa's objectivism.' *Review of Political Economy* 17, no. 3: 412-441.
- Lawson, T. 2003. *Reorienting Economics*. London: Routledge.
- Maas, H. 'Methodology before Friedman.' In *Economic Methodology: understanding economics as a science*, by M. Boumans and J. B. Davis. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Mäki, U. 1990. 'Mengerian economics in realist perspective.' *History of Political Economy* 22, annual supplement: 289-310.
- Mäki, U. 1997. 'Universals and the *Methodenstreit*: a re-examination of Carl Menger's conception of economics as an exact science.' *Studies in History and Philosophy of Science* 28, no. 3: 475-495.
- Marion, M. 2005. 'Sraffa and Wittgenstein: physicisism and constructivism.' *Review of Political Economy* 17, no. 3: 381-406.

- Marshall, A. 1890 [1920]. *Principles of Economics: an introductory volume*. London: Macmillan. (馬場啓之助訳 [1965-67] 『経済学原理』 東洋経済新報社。)
- Martins, N. 2006. 'Capabilities as causal powers.' *Cambridge Journal of Economics* 30: 671-685.
- Martins, N. 2007a. 'Ethics, ontology and capabilities.' *Review of Political Economy* 19, no. 1: 37-53.
- Martins, N. 2007b. 'Realism, universalism and capabilities.' *Review of Social Economy* 65, no. 3: 253-278.
- Martins, N. 2009. 'Sen's capability approach and post-Keynesianism: similarities, distinctions, and the Cambridge tradition.' *Journal of Post Keynesian Economics* 31, no. 4: 691-706.
- Martins, N. 2011. 'The revival of classical political economy and the Cambridge tradition: from scarcity theory to surplus theory.' *Review of Political Economy* 23, no. 1: 111-131.
- Marx, K. 1887. *Capital*, vol. 1, 1867; English translation. London: Sonnenschein. (長谷部文雄訳 [1964-65] 『資本論』 河出書房新社。)
- Nussbaum, M. 2000. *Women and Human Development: the capabilities approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nussbaum, M. 2003. 'Tragedy and human capabilities: a response to Vivian Walsh.' *Review of Political Economy* 15, no. 3: 413-418.
- Nussbaum, M. 2006. *Frontiers of Justice: disability, nationality, species membership*. Cambridge MA: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Pasinetti, L. 2005. 'The Cambridge school of Keynesian economics.' *Cambridge Journal of Economics* 29: 837-848.
- Pressman, S. and G. Summerfield. 2000. 'The economic contributions of Amartya Sen.' *Review of Political Economy* 12, no. 1: 89-113.
- Putnam, H. 2002. *The Collapse of the Fact/Value Dichotomy and Other Essays*. Cambridge MA: Harvard University Press.
- Putnam, H. 2003. 'For ethics and economics without the dichotomies.' *Review of Political Economy* 15, no. 3: 395-412.
- Putnam, H. and V. Walsh. 2007. 'Facts, theories, values and distribution in the works of Sir Partha Dasgupta.' *Review of Political Economy* 19, no. 2: 181-202.
- Reiss, J. 2012. 'Causation in the sciences: an inferentialist account.' *Studies in History and Philosophy of Biological and Biomedical Sciences* 43: 769-777.

- Reiss, J. 2014. 'Struggling over the soul of economics: objectivity versus expertise.' In *Experts and Consensus in Social Science*, edited by C. Martini and M. Boumans. Springer International Publishing Switzerland.
- Rymes, T. K. 1989. *Keynes's Lectures, 1932-35: notes of a representative student*. Basingstoke: Macmillan in association with the Royal Economic Society. (平井俊顕訳 [1993] 『ケインズの講義：1932-35年：代表的学生のノート』東洋経済新報社。)
- Sen, A. 1970. *Collective Choice and Social Welfare*. San Francisco: Holden-Day.
- Sen, A. 1978. 'On the labour theory of value: some methodological issues.' *Cambridge Journal of Economics* 2: 175-190.
- Sen, A. 1980. 'Description as choice.' *Oxford Economic Papers* 32, no. 3: 353-369.
- Sen, A. 1987. 'Dobb, Maurice Herbert.' In *The New Palgrave: a dictionary of economics* vol. 1, edited by J. Eatwell, M. Milgate and P. Newman. London: Macmillan.
- Sen, A. 1993a. 'Capability and well-being.' In *The Quality of Life*, edited by M. Nussbaum and A. Sen. Oxford: Clarendon Press.
- Sen, A. 1993b. 'Positional objectivity.' *Philosophy & Public Affairs* 22, no. 2: 126-145.
- Sen, A. 2003. 'Sraffa, Wittgenstein, and Gramsci.' *Journal of Economic Literature* 41, no. 4: 1240-1255.
- Sen, A. 2004. 'Elements of a theory of human rights.' *Philosophy & Public Affairs* 32, no. 4: 315-356.
- Sen, A. 2005. 'Walsh on Sen after Putnam.' *Review of Political Economy* 17, no. 1: 107-113.
- Sen, A. 2009. *The Idea of Justice*. London: Penguin. (池本幸生訳 [2011] 『正義のアイデア』明石書店。)
- Sraffa, P. 1960. *Production of Commodities by means of Commodities: prelude to a critique of economic theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Walsh, V. 2000. 'Smith after Sen.' *Review of Political Economy* 12, no. 1: 5-25.
- Walsh, V. 2003. 'Sen after Putnam.' *Review of Political Economy* 15, no. 3: 315-394.
- Walsh, V. 2008. 'Freedom, values and Sen: towards a morally enriched classical economic theory.' *Review of Political Economy* 20, no. 2: 199-232.
- Wittgenstein, L. 1953 [1963]. *Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe. Oxford: Blackwell. (藤本隆志訳 [1976] 『哲学探究』大修館書店。)

Sen's Economics in *The Idea of Justice*: Induction vs Deduction

by Tadashi HIRAI and Yukio IKEMOTO

ABSTRACT

In *The Idea of Justice*, Amartya Sen started his argument by differentiating his capability approach from the mainstream in terms of structure: comparative vis-à-vis transcendental. He called the mainstream approach of justice as transcendental because it has been trying to construct a theory of justice based on fundamental principles questing for perfection. Sen insists that it is impossible to construct a perfect theory of justice because our world is far from perfection and that what we need is a more practical approach, which can be used to compare feasible options that we actually have and to choose one from among them. What lies behind this strategy is respect for a plurality of values and reasoning in society. In this context, description plays a key role in this approach, given that plural values and reasoning can be reflected only in an inductive manner which requires rich description.

This difference can be applied to his approach in economics. The mainstream economics has been constructing models and theories based on hypothesis such as utility maximization. In this sense the mainstream is “perfect” but not practical as such hypothesis is not realistic. In the field of development economics he uses more practical and realistic approach based on statistics. His main contributions in the field such as the cause of famine and missing women started

from examining statistics. His argument always starts from reality and is thus inductive, which is in sharp contrast with the deductive mainstream approach. Sen's approach can be traced back to the Cambridge tradition, which typically embraces inductive methods of reasoning. The purpose of this article is to examine how Sen's approach is related to it with a particular focus on the influence of Maurice Dobb. In relation to this, some possible extensions of his approach will be discussed.